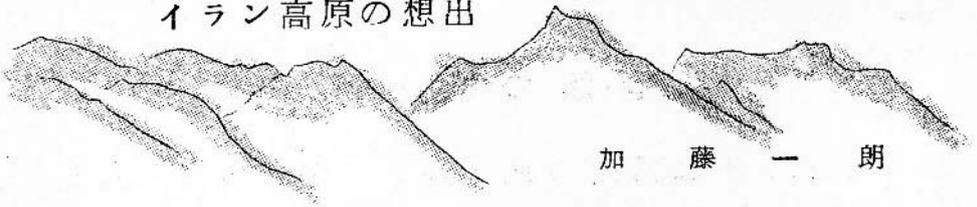


イラン高原の想出



加藤一朗

つい昨日のことのようにおもうが、イラン高原に短い旅をこゝろみてから5年余になる。

昨年末エジプトから帰国した同僚の藤本勝次先生と中近東の想出話をしているうち、私がつい「オアシス」ということばを日本風に「樹々にかこまれた涼しい池辺」といつたいみで用いると、早速同先生はこう訂正された。

「オアシスは池とはかぎりませんね。水——どんな種類のものでも、水があればオアシスですし、人のすむ町や村がつまりオアシスだからね。」と。

たしかにそうであつた。エジプトと同様イランでも家屋の並んでいるところがオアシスであつた。近代都市テヘランも巨大なオアシスであつた。それを緑にかこまれた池辺のように、日本的なロマンテイックないみで、このオアシスということばをつい用いてしまつたのは、早くも現地での実感を私が忘れていたからだ。藤本先生に注意されたおかげで、やゝこの実感をとりもどした。

というのも、私がものおぼえがわるいということももちろんあるが、気候といふ風土といふあの広大な乾燥地帯は、吾国のそれとはほとんど対蹠的といつてもよいほどちがつていることが、何よりもこの錯覚の原因であつたらう。

ともかく広い、そして乾いている。先史文化の遺跡テペ・シアルクを訪れるために、首都テヘランから東方のカシヤンの町にむかつてドライブしたときは、土地が乾いているというよりも、焼けただれてでもいるように、赤黒いすさまじい色をしていた。

この折であつた。同乗のポーランドの言語学者ヴェリフオ氏が突然行手を指さして、「ミラージ(蜃気楼)！」と叫んだ。このときの蜃気楼はふつう話にきくような、空中高く浮ぶ幻の都市や林ではなかつたが、たしかに遠景に広々とした湖が眺められた。それはまさしく夢のような眺めであつた。

すでに数年間もイランに住んでいて、あちこちと旅行して歩いたヴェリフオ氏の話では、隊商や遊牧民が道に迷い、飢え渴ききつているときなど、この曇気楼の湖にひかれて、行けども行けども塩化した白っぽい原野をさまよい湖どころか水一滴見あたらず、ついに全滅することがあるという。こんなとき、慣れた旅人は、ラクダを放ち、ラクダの進む方向にとぼとぼと歩いて行くと、ついに水のあるところに到達するという。ラクダは人間のように曇気楼にだまされないし、また本能というか、水のあるところが勘でわかるらしいという。

こんな話をきながら、人の姿一つみることなしに、何哩も何哩も車で走りつづけたあとに——— さいわい車の故障もなく、素焼の壺につめた飲料水も残っているうちに大げさにいうなら、おいはぎにもあわずに——— カシヤンにたどりつき、土でつくった家並を前方に見出したときのホツとしたきもちが格別であつた。

このように、わづかな滞在のあいだにも、吾々はイラン人なみに、人なつこくなつていた。つまり無限の荒蕪の砂漠をドライブしたあとには、人の影こそがオアシスであつた訳である。

往復2日間のカシヤン行ドライブをおえて、吾々の根拠地テヘランの1角が見えはじめたときも、「自分のオアシスにかえつてきた」ということばほど、びつたりと吾々のきもちをあらわすことばはなかつたろう。

安くて
うまい 軽 食 堂

若 草

大学前通り

美しいムードがあなたをお待ち致しております